

人は環境をつくり
環境が人をつくる
キーワードは
MOH (もおっ)

M → もったいない
他の生命を奪って得たものを使わ
せて頂く

O → おかげさま
人は一人では生きられない、環境
によって生かされている

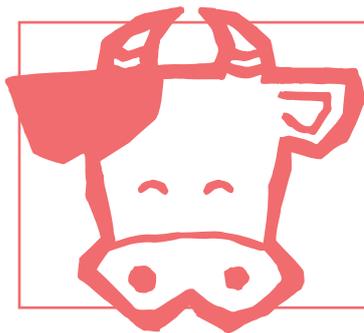
H → ほどほどに
欲はほどほどに、良き環境を作り上
げるために

も

お

M・O・H 通信

3号
2004
October



「M・O・H」のマーク = 牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタン
ガスになり、肥料にもなります。大地を作り、
食物を育て、生物を養います。私たちは命の
源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、
循環型社会の象徴とします

目次

「わらの家」●中野 桂	1
インタビュー●藤井 絢子	3
「崇敬の心」●西島 喜紹	4
座談会「家訓を考える」●愛東町の有志4名	5
環境の最も基本的な意味●本田 裕志	7
4コマ漫画●しみず やすお	8
みんな みんな みんなだよ●今関 信子	9
講演日記	10
小学の教え●井上 昌幸	11
本の紹介	12
私の心に残る一言●森 建司	13
伊吹山奉納太鼓踊り●辻村 耕司	14
お知らせ、募集、編集後記	裏表紙

個人の自由と権利は 「ほどほど」に

現代の自由主義社会にも「権利と義務」という
形で決して自由が野放しにされているわけではな
いが、この経済社会においては自由主義が大手を
振ってまかり通っている。現在も経済の活性化に
役立つ事であれば規制緩和や貿易の自由化などが
国内のみならず、地球的規模で進んでいることは
周知の事実である。

経済論としてこの是非論は、またの機会に専門家
にお任せするとして、個人と環境との関係(この
場合は人間関係も含む)においても、自由主義が
いさか行き過ぎている事が今日の混乱の要因と
思われるが如何なるものだろうか。個人と家族、家
庭、地域、学校、職場、国家、そして自然環境な
どなど全てのかかわりの中で生きている以上、野
放しの自由など有るわけが無く、その環境との共
生を果たすためにも時には「自己犠牲」も辞さず
という生き様が問われよう。
勝手気侷な自由と引き換えに、心豊かに共生する
幸福を求めたいものである。

(文責 森)



わらの家 ストローベイルハウス

Straw bale house in Hikone



カナダの自然体験が生活の原点となる

2003年3月琵琶湖東岸のほとり新海浜に素敵な家作りが始まった。米どころ滋賀県産のわら、琵琶湖に群生する葦、解体された蔵の土を使って家を作ろうというのだ。発案者は、滋賀大学助教授の中野桂さん。彼は東京生まれで東京育ち、カナダで暮らしたことが彼の自然観を変えた。視界を遮る人工的な建物が無い雄大な自然、自然とともに生計を立てる人々、たとえ虫に刺されても薬をつけることが憚られる、川の清冽さ。成田空港に降り立つ時も、不快感を禁じずにはいられなくなってしまった。

そんな折、滋賀大学からのオファーがあった。滋賀大学の研究室からは琵琶湖と田園、山が眺望できる。視線を遮る建物はない。2000年滋賀県に居を移した。家族（妻、男の子二人）とともに。



1階部分がストローベイル。やわらかな外観。

住居探しが始まった。滋賀県立大学の仁連教授が手を貸した。「子どもは車社会になれていない。歩道があり琵琶湖と遊べて、自然がある場所を」。見つけた場所は新海浜。貸し農園も近くにあり、有機野菜も手に入る。奥さんも喜んだ。「妻は自然大好きなんです。環境に対する意識レベルは私より高い。」

滋賀県産の素材で家を創ろう

そして、家作り。彼は考えた「自然の素材を中心にした環境負荷の少ない家が作れないか。そういえば2001年にカナダで見たことがある“わら”をつかった家。」早速、成安造形大学の大岩剛一先生に相談した。大岩先生は彼の友人でスローライフブームに火をつけたGlow is Beautyの著者で、「なまけもの倶楽部」の仲間でもある、辻信一氏の兄君だ。早速ワークショップがスタートした。稲わらは、中主町の中道農園さん、葦は近江八幡の葎留さん、左官は守山の小林左官店、八幡瓦の廃材も入手できた。そして仁連先生、大岩先生、なまけもの倶楽部の仲間、スローデザイン研究会、オーヤ企画、



お子様も大満足。玄関テラスにて。

学生…多くの有志が集まった。設計が出来、基礎も出来た。準備が整った。
北米の工法と日本古来の技術で、お洒落な家になる

作業開始だ。乾燥した稲わらを40×30×90センチのベイル（四角いブロック状）にまとめる。8反分約400個。これが家の壁となる。ごついで壁だ。これを積み上げていく、竹串でさしてつなぐ、土がのりやすいように、日本古来の工法“下げ縄”を採用。そして土を手で塗りつける。人海戦術だ。弁当代持参で募集した。たくさんの仲間が参加してくれた。

竹小舞と違い乾きが遅い。ヒノキのかんな屑は床下に引いた。荒壁から大直し、石灰分の多い漆喰を使い土佐漆喰で仕上げた。台所は天津磨きという左官技術を用いた。窓枠に和紙を張り付け予防と上品さをもも出した。薪ストーブを置く床には八幡瓦を敷き、玄関にはお洒落な花置きが左官職人の手でしつらえられた。2003年7月完成。

「若い人にも喜んでもらえるお洒落



わらをベイルにする作業。



キッチンの塗り壁が天津磨き。きれいな仕上がりに。



ストーブを置く床に八幡瓦の廃材を友人らと共に張った。



お洒落な花いけ。職人の美意識を感じる。



2階の壁断熱は琵琶湖のヨシ。

ないイメージを大切にしました。取り組みやすく抵抗感を持たずに「わらの家」に興味を持ってもらえれば」と願った。今年京都美山で一軒建築された。

中野さんは、「この住居は自宅でもあり、実験住宅でもあります。初めての取り組みなので、何かおこるかわかりませんが、良いことも、悪い事も公表しようと思っています。生きデータが得られると思います。幸

い周囲からの反対もなく、妻も積極的にリードしてくれるのが嬉しいです。」

**家作りは人づくり
課題は多いが
対策作りも楽しい**

最後に一問一答で質問しました。

【問い】良かった事は？

【答え】①寝転んで見上げたとき木組

みを見るときいい家だなと思います。
 ②冬は薪ストーブだけ、夏は風を通すだけです。全室快適
 ③洗濯物を室内に乾すとパリッと干せ結露は無縁。ペアガラスとわらの壁の効果だと思えます
 ④人がたくさん関わって、ワイワイとイキイキとした建設現場でした。近所の人も珍しがって見に来てくれました。コミュニケーションたっぷり家作りでした。
 ⑤職人さんの心意気を知りました。お金じゃないやりがいいだ。

【問い】課題は？

【答え】①わらの状態を把握する必要がある（水分が入ると腐る可能性もある）②わらの虫（小さくて害はない）やげじげじなどの昆虫が出る
 ③窓枠の雨じまいが心配
 ④凍害の危険性
 ④何年か経過すると外壁の塗りなおし

【問い】取り組みたいことは？

【答え】①有機食品の普及。高価格で普及が進んでいないが、海外事例を参考に説明や啓蒙で市場を広げたい

い②有機食品購買や環境問題に対して、消費者グループや環境生協など女性の関心は高いが、若い世代の関心が低い。カッコイイことと捉えてくれば…。水上バイクで遊んだ琵琶湖の水を君は飲めますか？生活の中で環境問題を社会問題として捉えていければ、社会は変わると思います。



中野 桂

なかの かつら ●1963年、東京生まれ、京都大学文学部卒業後国際基督教大学にて修士課程修了、プリティッシュユニオンピア大学経済学研究科博士課程修了。2000年より滋賀大学経済学部講師、2001年より同大学・助教授。現在の専門分野は「マクロ経済学」「産業組織論」。

インタビュー

母の視点で環境に取り組む

滋賀県環境生活共同組合 理事長

藤井 絢子さん



7月3日八日市市市辺ユースプラザで滋賀県環境生活協会の「ミニフオーラム in ようかいち」が行われた。講師は理事長の藤井絢子さん、演題は“子どもの健康と環境”。藤井さんは4人の娘さんに恵まれ、菜の花エコプロジェクトや環境生協リサイクルせっけん協会、そして国のバイオマスニッポン総合戦略の策定委員もつとめ、精力的な活動で知られる。琵琶湖と日本の環境に疑問を投げかけ、活動する日本で最も熱い主婦だ。

その藤井さんが、絵本の話を開かせてくれた。「絵本の世界は見て、聞いて、触って、語り、読む。人間の五感を養う最も効果的なものです。私の娘は、字を覚えられなくても絵本を上手に語りました。自宅には数千冊の絵本がありますが、一つとして同じ本はない。それを毎日、娘にせがまれて読んでいました。それが私の子どもの情操教育でした。主人公と一緒にワクワクドキドキハラハラしながら絵本の世界に子どもと一緒に羽ばたきます。」

そんな、経験のなか藤井さんは荒れていく琵琶湖に思いを寄せる。

「私は死んでゆく琵琶湖を子どもに渡したくはない。自然が豊かで美しい滋賀県の風土をこれ以上壊さないために、リサイクルせっけんやせっけん歯磨きを勧めます。自分の身の回りをきれいに保つために、合成洗剤や漂白剤を使わないようにしたい。皆さん、合成洗剤や漂白剤の成分が自然の微生物（有機物を分解してくれる有益な生き物です）を殺していくんです。これは合併浄化槽（個人住宅用の污水处理施設）を見るとわかります。私は、今の便利な生活を否定はしませんが、せめて、自



分のおしっこやうんこは、自分の目で確かめて、健康状態を把握することも大切ではないかと思えます。人間が自然を壊していくのではなく、自然の中に人間が住むような、そんな環境を子どもに残したいと思えます。そこで菜の花プロジェクトを提唱しました。廃油をリサイクルして化石燃料の使用を減らしたい。町にリサイクルエネルギーの車が走っているなんて、素敵じゃないですか。」この菜の花プロジェクトは全国的な広がりを見せ、日本地図が黄色になる日は近い、といわれている。各地でサミットも開催され大きなうねりとなっている。

「買いた物が世界を変える」この言葉も画期的なスローガンだ。

「今の日本は過剰包装で美化しすぎ、ドイツのスーパーでは商品がそのまま売られています。消費者は不要な包装紙はスーパーのゴミ箱に捨てて、余計なゴミは家庭に持ち込まない。徹底しています。だから、消費者が自分の目で選んだ買物、買い方をしていく事が時代の流れを変えていくと思えます。行政や企業にまかせっきりでは何も変わらない。変えるのは、私たちです。」

琵琶湖は被害者
加害者は私たち

彼女のどこからエネルギーが湧き上がるのだろう。突撃インタビューを試みた。

「上智大学の学生時代、石牟礼道

子さんの“苦海浄土”を読みました。その頃は学生運動も盛んで、世の中は高度経済成長の真只中。私は水俣病に苦しむ水俣の人達に強い衝撃を受けました。チッソにモノ申そうと東京で“水俣病を告発する会”にも参加し、チッソの株主にもなりました。私の心に水俣がズツと引っかかっていました。そうこうするうちに結婚し主人が転勤、滋賀県守山市に住まいを移しました。縁つてあるんです。守山市にはチッソの工場がありました。チッソの方で環境にとっても熱心に取り組んでいた。彼には環境生協の監事をしていただくなど、活動をともにしてきました。1977年5月、琵琶湖に赤潮が発生し、水質に赤信号がともりました。その時、「水俣の二の舞はすまい！」と誓ったんです。なぜ汚れているんだらう？と考えた時、汚れている私たちが被害者だ、汚していった。なにかをしなないと…いても立つてもいられませんでした。」



崇敬の心 「そのうち」

西島 喜紹

かけがえのない家族の笑顔

我が家は、現在八人家族、私共そして娘夫婦と孫四人、毎日喧騒な中にもいつも笑い声が絶えない暮らしをさせていただいております、大変有難

そのうちお金がたまったら
そのうち家でも建てたら
そのうち子どもから手が放れたら
そのうち仕事が落ち着いたら
そのうち時間のゆとりが出来たら
そのうち そのうち そのうち
出来ない理由を
繰り返している間に
結局何もやらなかった
空しい人生の幕が下りて
頭の上に淋しい墓標が建つ
そのうち そのうち 日が暮れる
今来た この道かえれない

亡き母の背中に学ぶ人の道

私の母は商家に嫁ぎ破産、配偶者との死別、息子の戦死と人生のどん底を味わった苦勞人であったが、明治生まれの女性らしく、亡くなるまで気概を持った人であった。それだ

いことだと感謝している。私には實際四人の子宝に恵まれながら一番最初に授かった娘だけが元気に生まれ、後の三人は残念ながらこの世に生を受けることなく天国に召されていった。しかし幸いな事に娘には四人の元氣な子どもに恵まれ、私も今や一端の好々爺になりつつある。
理事長に就任して間もない頃、心身ともに疲れる日々が続いたとき、孫の一拳一動に癒された。ご神佛が私に与えてくださった最高の宝物だ。これも亡き母のおかげと思っている。

崇敬の心で神佛に感謝する

今、私自身の人生を振り返ってみても、どんな苦しい時もイヤな時でも不思議と家族や周囲の人々、特に私が仕えさせていただいた歴代の理事長初め多数の諸先輩方のご庇護を賜っていることをいつも痛感している。考えてみれば己れ一人の力なんて事

そのうちなんとかならないよ

「経営者として「そのうち」やればなんとかなるといふ、ネガティブな発想の愚かさを感じる。「そのうち」でとり残されることのないように心したい。

西島 喜紹

にしじま よしづく ●長浜信用金庫理事長、昭和十二年生まれ、長浜市出身、昭和三十年長浜信用金庫入庫、平成十年理事長就任

菜の花プロジェクトは 未来への贈り物です

藤井さんの活動は大変具体的で賛同する自治体や市民が急増している。「まず、環境生協。価格優先ではなく、安全で安心な生活用品を集めました。植物由来の成分で体にいい、環境を壊さない商品です。そして菜の花エコプロジェクト。私は菜の花畑が大好きで、菜の花の香りが疲れた体を癒してくれます。菜の花を収

穫し食品に油粕は有機肥料に、菜種油は食品に利用され廃油は再処理をさせてつげんや精製して燃料に生まれ変わります。有機肥料を土に返す事で土も元氣になります。このプロジェクトは未来への贈り物だと思っています。」
このプロジェクトは滋賀県愛東町から始まった。愛東町ではエコステーションを作りNPOで循環を促す地域づくりの拠点として菜の花エコ推進に町を上げて取り組んでいる。



藤井さんの撒いた菜の花の種が花開く日は近い。

藤井 子

ふじい あやこ ●神奈川県生まれ。菜の花プロジェクトネットワーク会長。上智大学文学部卒業。滋賀県環境生活協同組合理事長。環境省中央環境審議会委員。農林水産省「バイオマスニッポン総合戦略」策定プロジェクト・アドバイザリーグループ委員。リサイクルせつげん協会会長。日本NPOセクター評議員。
著書／菜の花エコ革命 (株)創森社
(取材場所)環境生協、写真)辻村写真事務所、取材)編集

座談会2

「家訓を考えよう」

■場所 愛東町役場会議室
 ■日時 平成16年8月21日



参加者の生な声が聞ける、と好評な座談会第2弾は「家訓を考えよう」。今回は愛東町在住の方4名にお集まりいただきました。前知識もなくてもかなりのテーマ設定に参加者の戸惑いは隠せませんでした。真剣に取り組んでくださいました。

家族の会話が絆を深める

●司会 本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。突然ですが、今回のテーマは「家訓を考えよう」ということで、皆さんの暮らしの中でこれは大切にしたいという事柄などをお話いただけたらと思います。

●福澤 牛を家の中で飼っていた光景がいまだに忘れられません。牛を大事にして家の入口に牛がいて、人間と牛と一緒に生活していた。びつ



ちゃんにまかせつきり。リサイクルやゴミの分別もおばあちゃんがしてくれています。靴をそろえること、モノを大事にすること、食べ残ししない事など、身を持って教えてくれます。地域・社会の中でリサイクルの教育は徹底されています。子どもたちも変わってくるんですね。

●福澤 ええ、リサイクルは昭和56年からやっています。

●村山 福澤さんの牛の話はびっくり。うちは子ども男の子二人と主人と私、おばあちゃん。わいわいガヤガヤ賑やかです。おばあちゃんも話の中に入ってくる。

●田 くりしました。私は鹿児島から昭和42年に愛東町に来ました。その頃の愛東町は田舎で道は車が通れるぎりぎりの幅で、耕運機もなかった頃グループを作って手植えで田植えをしていました。川の溝には蛭がいて、薪を取るために山はきれいに手入れされて、秋にはたくさんマツタケが取れた。今は放つたらかし。大雨が降ったら川の水かさが増し木が川を塞がないかと心配です。子どもは長男と長女二人です。ともに結婚し独立しています。孫もいます。主人と二人暮しです。主人と私は鹿児島出身で、愛東町には親戚もありません。私は低農薬で野菜を作って子どもたちにも食べてもらっています。若い人は素直な人が多く挨拶もきちっとしています。

●田 主人、両親、中学3年男の子、中学1年女の子の6人家族です。嫁に来てから勤めています。家のことや子育てはおじいちゃん、おばあ

少し変化がありました。僕は外でニコニコ中でトーンが低くなるタイプですね。家で喋るほうではないので、お互い何してるかわかってへんけどどこかで心配されてるし、自分も心配してる。顔色見て声かける事もあるし、口には出さないけど、親子かなと社会に出て感じました。姪っ子の存在は大きいですね。子どもの可愛いしぐさやみんなが集中できることは言い換えれば家族の支えになっているのかも。村山さんのご家族、男3人兄弟はうらやましいです。僕は役場勤めが長いので、いっぺん外に出てみたい。外に出ると、家族の有難さが身にしみるのでしようね。今は家族がいつもいて当たり前です。



親の姿を子どもに見せる

●村山 大阪の専門学校に通っていた頃、息子が「お弁当ありがとう」で行ってくれてうれしかった

●福澤 主人はサラリーマンで近所に親戚もなく、一人で子育てしました。買い物は二人を連れて鍵を出かけましたし、子どもたち反抗期あったのかなあ？子育てで苦しんだ覚えはないですね。どちらかというと、一緒に遊んでた。本読んで、子どもが悪い事をすると一緒に謝って、



素直に育ちました。娘は夏休みにお手伝い、ご飯炊き、息子はてんぷら担当と一緒に食事を作っていました。そうそう、食事の準備や掃除もしてくれました。自営業をはじめて親が忙しい頃は子どもが家の事をして九手いました。私がゴミを落とすと「自分でひろてえ」って怒られた(笑)。子どもが小さい頃は田圃の畦でおにぎり食べたり、よく遊びましたね。今は娘に孫が二人できまして、お菓子を欲しがっても「お母さんがいいと言った？」と聞いてから与えています。やはり、娘が嫌がることはしたくないので…。娘は孫の勉強(6歳、2歳)も気にしますが、「名前は学校行ったら覚えるから、元気が一番」と言っています。

●**広田** 子どもに対して何が出来るかなあ。自分が働いている姿を見て学んで欲しい。子ども自身でどう思

うか、心で感じるようになって欲しい。進路にしても親が勧めるより、自分がどうしたいかを決定できる子になって欲しい。上の子ははっきりいわないんです。下の子は自分のことは自分で決める気持ちを持っています。これかこれからも親がいなくてもしっかりと生きていけるように成長して欲しい。働いているうちは嫌も出来ない、手も掛けられない、見守るしかない。だけど私の一所懸命さを見て欲しい。父と母は二人三脚で仕事と家庭を作っています。食事や田圃や家の用事はおばあちゃんに迷惑を掛けているし、子どもに勉強を教えられなかった。私は「生きてゆく姿」を子どもに身を持って教えた。毎日の積み重ねだと思えます。不安ですけど、一所懸命、みんなに教えてもらってます。

●**福澤** 私の頃と違って若い方の子育ては大変なのね。広田さん、感心。

●**広田** 先日も子どもが熱を出したんですけど、仕事で帰れなくて電話一本のやり取りでした。子どもに十分なこととはしてやれなくて、子どもの側にいてやれないけど、子どもがどう生きていくか、毎日の生活の中から自分で考えてくれれば…



●**村山** 私の友達も「おばあちゃん子どもを猫かわいがりするんで、とられてしまいそうや」といつてました。おかしなもので娘がおばあちゃんに焼もち妬いてしまうのね。でも最後は母親ですよ。

●**広田** そうですね。

●**福澤** うちの孫も私にダッコされないで寝ないので、私のところに来てしまう。

●**広田** 同じですね。

●**村山** ラクと思えば？

●**福澤** 一歩離れてみると楽に思えます。始めの子はどうしてもおばあちゃん子になりますね。

●**村山** うちの嫁は気にしない。

●**司会** お話も佳境に入ってきましたが、これからやってみたい事などありましたら

●**福澤** 一人暮らしのお年寄りの話相手になったり、お手伝いしたり出来ればなと思っています。私も年を経ていくので先輩の話も聞きたいと思っています。

●**広田** 一日、一日頑張って生きたい。

●**村山** 喜んで下さった顔を拝見するのがうれしい。みんなに感動して喜んでいただけるように(ヨサコイとか)。

●**奥村** 自分の時間を作って気持ちに余裕を持てるようにしたい。仕事も遊びも存分に出来るように。仕事の段取りを考えて、後まわしにしないで要領よくこなしたい。親に与えられた人生を楽しく過ごせるように、相手に幸せを与えられるように。

●**広田** 良い方に考えていきます。

●**司会** では、家訓となる言葉のご記入をお願いします。

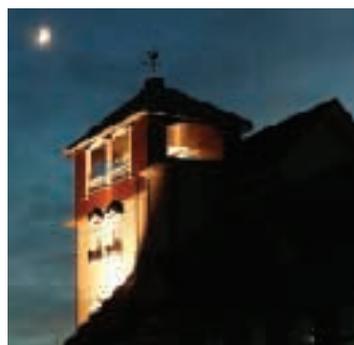
●**福澤** 「健康」

●**広田** 「心の中心で愛をさげぶ」

●**村山** 「笑顔」

●**奥村** 「時間を大切に」

●**司会** 皆さん素晴らしい家訓です。今回はお忙しい中、示唆のあるお話を頂戴しまして、参考になりました。家訓はパネルにしてお届けします。本日はありがとうございました。



マーガレットステーションの夜景

- 出席者(敬称略)
- 福澤 ミヨ子 59歳 主婦
 - 広田 扶美代 43歳 会社員
 - 村山 すず子 48歳 自営業
 - 奥村 伊佐男 30歳 愛東町職員
 - 辻村写真事務所 3人家族
 - 司会・まとめ 編集

「環境」「環境問題」という言葉は何を意味するか。

本田先生の倫理学講座
Part.3

本田 裕志

■「環境」の最も基本的な意味

「環境」とは何でしょうか。手許の漢和辞典(角川書店の「新字源」)によれば、「環」は「周囲をとりまく」「かこむ」、「境」は「ところ」「場所」という意味であり、したがって「環境」の語源の意味は、「(あるものの)周囲をとりまく場所」ということです。ちなみにこれは、西洋各国語の「環境」に相当する語(英 environment 仏 ambiance 独 umgebung)にも共通しています。すなわち、私たちにとつての環境とは、最も基本的には、「私たちの周囲をとりまく場」、つまり「私たちがそこに存在し、生き、活動しているところの場」ということです。

■社会環境と自然環境

私たちはしばしば「家庭環境」「教育環境」「労働環境」などと言つた言い方をしますが、これらの用例における「環境」が右の基本的意味に即していることは、容易にわかると思います。これらはそれぞれ家庭生活・教育・労働という私たちの社会的活動が営まれる社会的な場を意味しており、「社会環境」と総称されます。しかしこの種の「環境」は、少なくともそれだけでは、「環境問題」「環境汚染」「環境破壊」等の用例における「環境」には該当しません。後者の「環境」とは「自然環境」のことであつて、社会的活動を含む私たちのあらゆる活動を包括し支える生命活動、すなわち人間の生物としての生活が、そこで営まれる場としての、自然そのものあるいは自然のシステムを意味しています。

■自然環境の二つの機能

自然環境には、二つの重要な機能があります。その一つは、産業その他の社会的活動や日常生活を含む私たちの一切の生活の営みのために、必要な(酸素・水・食物から産業用原材料やエネルギーに至る)あらゆる資源を供給することで、自然環境の「ソース機能」と呼ばれます。

す。資源には、石油や石炭などのように、出来合いの一定量のストックとして存在するものと、酸素・水・生物資源などのように絶えず変形や再生を繰り返しつつ流動・循環するフローの形で存在するものがあり、前者を再生不能資源、後者を再生可能資源と呼び分けます。自然環境のもう一つの機能は、私たちの生活の営みから排出される(糞尿やCO₂から種々のゴミや化学物質に至る)あらゆる廃棄物や汚染物を吸収・分解・浄化することで、これは「シンク機能」と呼ばれます。

■自然環境の不可欠性・代替不能性・有限性

右の二つの機能は、私たち生きとし生けるものが生存してどのような活動を行うためにも絶対に不可欠であると同時に、自然環境以外の何物によつても代替されえないものです。しかも忘れてならないのは、この二つの機能のキャパシティが有限であることです。石油や石炭は埋蔵量をすべて使い切れば涸渇してしまふし、生物資源も限度を越えて乱獲・乱伐すれば絶滅に瀕してしまいます。また廃棄物には、CO₂なら炭素換算値にして地球全体で年間約二十億トンまでといったように、自然環境が吸収・分解・浄化できる限界があつて、それを越えて排出されれば環境中にどんどん蓄積されていつてしまいます。

■環境問題とは何か

かつて人口も少なく、生産や消費の規模も現在と比べれば桁違いに小さかった時代には、自然環境のキャパシティにはあり余るほどの余裕があり、人類はその限界など考える必要もなく、好きなだけ資源を使い、廃棄物を排出することができました。この事情は、産業革命を経て人口・生産・消費が飛躍的に増大しはじめて以降も、二十世紀の中ごろまでは、ほとんど変わりませんでした。ものを好きなだけ生産・購入・消費できることはよいことだ、という価値観は、この古きよき時代にあつては、人類の生活の質を向上させるのに大きな役割を果たした正当な考え方でした。

むだいずむ

© しみず やすお
買い物編 その2



自分自身が持ち込めば、無駄な袋は、必要なし!



しかし一九七〇年ごろを境に、極度に巨大化した生産・消費と人口は、地球の自然環境の限界をあらゆる面で越え出るようになりました。生物資源は乱獲・乱伐・乱開発によって次々と失われ、エネルギーや鉱物資源は涸渇して、その採取・開発はますます多くのコストと環境負荷を必要とするようになっていきます。CO₂は今や炭素換算値で年間六十億トン以上も排出され、またPCBや照射済み核燃料など、それを分解・浄化する機能が自然環境にほとんど、あるいはまったくないような廃棄物も発生しています。このように私たちの日常生活や産業活動による自然環境への影響が、そのソース機能とシンク機能の境界を越えた結果、自然環境が疲弊し機能不全に陥ることによって生じてくるさまざまな問題に、現代社会は直面しています。「環境問題」とは、これらの問題の総称です。環境問題の発生は、私たち生きとし生けるものの生存と一切の活動にとって不可欠な、かけがえのない場である自然環境の機能が麻痺し、あらゆる生命が危機に陥っていることを意味する事態です。この問題はどうしても解決されなければならず、その解決のためには、人口・生産・消費の規模を自然環境の二つの機能のキャパシティ以下に抑制する以外に、いかなる方法もないのです。

もはや、「欲しい物を欲しいときに欲しいだけ手に入れること」という時代遅れの幸福にしがみついている場合ではありません。今ではむしろ人々の不幸と災厄の原因でしなくなったものを、それが以前は皆の幸福に大いに寄与したからという理由で、いつまでも後生大事に守り続けることほど、愚かで危険なことはないのです。

(本田裕志)

前号「M・O・H通信」第二号の本講座の文章中、七ページ下段八〜七行目に「物質主義的幸福感」とあるのは誤りで、正しくは「物質主義的幸福観」でした。また、八ページ八〜九行目に「繰り返す」とあるのは誤りで、正しくは「繰り返す」でした。訂正とともにおわび申し上げます。(編集部)

みんなみんなみんなだよお

今関 信子



イラスト：佐々木洋一

年輩者のことを考えるとき、今でも、あの人の姿が頭に浮かぶ。私は、よくその人の家に行った。夏休みなどは、泊まりこんでいた。一人で電車に乗っていったから、一年生くらいからだと思う。私は、その人をバアチャンと呼び、そのつれあいをジイチャンと呼んだ。ジイチャンは、薫の親方だった。

朝、地下足袋、ゲートル、腹掛け、半纏など、いつもは目にしない衣服を身にまとった男達が、店と呼ばれる土間に出入りして、家の奥まで活気が伝わってきた。帳面を片手に、ときはき指示を与えるのは、番頭クラスのオジチャンだ。指示を受けた男達は、現場へと散っていく。

店での指示が終わると、オジチャンは、店の隣の詰め所と呼ばれている小屋に行く。ここには、女や年寄りが集まっていた。女達も現場を指示されると、たちまちいなくなった。

詰め所に来る人達は、日雇いだった。よいとまけのひもを引くのだ。よほど忙しくない限り、よほよほの人や乳飲み子を抱えた女は、仕事にあづかれた。とつぜん、家へ帰るはずの人達は、たいてい、そのまま詰め所にいた。

空腹の赤ん坊が乳にありつく頃、バアチャンが詰め所に姿を現す。櫛目の通った髪は、椿油で光っていた。半襟の白さが、目を引く。いつも掛けられているたすきは、袖を、働きやすく押さえていた。

「アネさん、おはようございます。」

みんなの挨拶を、ごもなげに受けて、バアチャンは、そそくさと台所に引っ込んでいく。みんなに気を遣わせない配慮だったのだろう。

「信子、盆の用意しな。」

そうバアチャンに言いつけられる時は、もう昼だ。直径五、六十センチはある盆は、二枚も三枚も並べられる。バアチャンは、そこへ、時にはつごんを、時にはどはを、くものつと丸めては盛り上げる。毎日、詰め所に顔を出すのは、残っている人の数を数えたのだろう。付け汁のだしは、削り節で取ってある。煮干でないと、ころが、バアチャンのこだわりだった。粗末な机に、ぎっしり箸が突き立てられた箸立てが出され、茶碗が山と積み上げられると、バアチャンが叫ぶ。

「みんな、みんな、みんなだよお。」

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。
ダイジェスト版で6月～8月の講演をお知らせします。

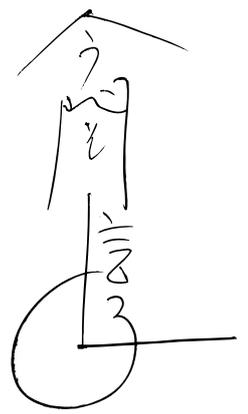
- 日 時：2004年6月26日（土）
- 主催者：六日会
- テーマ：「生活者M・O・Hの会」がなぜ必要になったか
～環境をこれ以上悪化させないために～
- 参加者：20名
- 場 所：長浜市春日会館
- 演 者：森 建司
- 内 容：1. 環境の悪化はなぜ起こったか 2. 経済至上主義からの脱却
3. 消費は美徳である？ 4. 個人のおもいを抹殺した洗脳 5. 哲学は知識でも情報でもない 6. 生活者の意識が世界を変える
7. M・O・Hの会で家庭のモラル再建と企業のあり方を考える

- 日 時：2004年7月21日（水）
- 主催者：大阪同友会オンリーワン研究会
- テーマ：循環型社会システムをめざして
～循環（もったいない）、共生（おかげさま）、抑制（ほどほど）～
- 参加者：30名
- 場 所：大阪府中小企業家同友会
- 演 者：森 建司
- 内 容：1. 経済至上主義社会から環境倫理社会へ 2. 企業間競争は大量
システムの成否が決める 3. 新時代の姿 4. 循環型社会システム
研究所のスタート 5. 循環型社会の人生哲学・経営哲学・政
治哲学を求めて 6. 循環型社会における哲学を考える会

- 日 時：2004年8月9日（月）
- 主催者：びわ南小学校
- テーマ：画一型から自立型社会へ
- 参加者：17名
- 場 所：新江州（株）会議室
- 演 者：森 建司
- 内 容：1. 経済至上主義社会の基本理念 2. 経済社会の競争原理 3. 今
日の問題 4. これ以上“もの”がいるか 5. 私の「人生を決め
た一言」は

- 日 時：2004年8月20日（金）
- 主催者：アイロップ株式会社
- テーマ：時代の変革を先取りする循環型社会システム研究所
- 参加者：17名
- 場 所：新江州（株）会議室
- 演 者：森 建司
- 内 容：1. 開発の三重構造 2. 循環型社会システム研究所の目的 3. 仕
事の内容 4. 新しい時代・事業を築いていくにはキーマンが必要

きやしゃな体のどこから、あの声が出るのかと思えるほど、大きな声だ。詰め所の残り組はもちろん、時には、通りを歩いている人まで、バアちゃんのお昼に集まってくる。
「アネさん、カボチャ、たくさんできましたんで使ってください。」
差し入れがあつて、天ぶらがつくこともあつた。刻みネギがつくこともあつた。
「みんな、みんな、みんなだよ。」
私は、バアちゃんの遠くまでよく通る声が好きだった。仕事にあぶれた人を、一人も残さず、心に掛けていたにちがいないあの声が。あの頃、バアちゃんは、七十才近かったと思う。迫力も艶もあつたバアちゃんの生き方を、六十代の坂登りをしながら考えている。



いませきの心 ● 1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。
主な著書／「小犬の裁判はじめます」1987重心社。青少年読書感想文コンクール課題図書

「さよならの日のねずみ花火」1995国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財
「地雷の村で『寺子屋』づくり」2003 P H P 研究所
など多数



滋賀銀行高田頭取のスケッチと参加者の一筆。

中国・宋の学者朱子が編纂した教科書

「小学」を学ぼう

その2

井上 昌幸

●時間をかけて学ぶ

安岡正篤氏著「人間としての成長」(PHP文庫)に書かれている内容ですが、中国の明の時代に、章楓山(しょうふうざん)という偉い学者がいて、ある時、進士試験(今でいう上級国家公務員試験)に合格した若い人がこれからどういう風に勉強すれば良いかと尋ねてきました。

章楓山は「なんと云っても『小学』をやることです」と云いました。云われた進士は自分は最高の試験に合格したのに「小学」をやれとは馬鹿にしていると思いましたが、とりあえず「小学」を読み始めてみると、なるほどと思うことが多いので一所懸命に「小学」を勉強して、再び章楓山を訪れました。ろくろく挨拶が終わらないうちに章楓山が「大分『小学』を勉強しましたね。」と云ったので、「どうしてわかりますか。」とたずねたら、「いや、話し方や対応の態度に自然に現れておりますよ。」と答えたということです。

つまり、論理や知識を頭で理解している間は駄目であって、これを「身につける」ということが大切であります。

習慣や知識が本身に身についてきますと、自分の行動に矛盾や衝突がなくなりまます。そして本能的・直感的になってきます。これは自動車の運転と同じことです。最初のうちは車と運転者はうまくなじまないうが、だんだん練習しているうちに車と人とが一体になってくることを皆さんも経験されているはずで、物事はどうしても時間をかけて習熟する必要があります。インスタントでは駄目なのです。

●人間の三不祥(さんふしやう)

荀子(じゆんし)という人が「人には三つの不祥(よくないこと)がある。幼い時に上の者に仕えない、卑しい人が立派な人に仕えない、おろかな人が賢い人に仕えない。これらは人の三不祥である。」と云いました。

幼い時に上の者に仕えないということは、いとけなくして敬(うやま)うことを知らないということです。幼児は物心が付いてくると敬う対象を求めます。一般的には母を愛の対象として、父を敬の対象とします。

敬う心が育つと必ず恥じるという心が湧いてきます。恥じると自分の行動を慎むようになります。

その幼児が敬うということを知らなくなってしまいました。そうしますと自ら恥じることがなく、自分の行動を慎むことをしなくなりまます。学校において先生は敬われないで、逆に侮(あなど)られていきます。これは今の社会教育に矛盾があるからです。早くこのことに気づいて、幼児が上のものを敬うことが出来るように家庭及び学校が変わっていかねければなりません。あとのふたつも意味は同じことです。

●三不祥

程伊川(ていせいせん)という人が「人に三不祥がある。年が若いのにどんどん上へあがる。次に、親のお蔭で若輩が重役になったりする。更にいろいろな優れた才能があつて、弁が立ったり、文才があつて表現が上手なこと、これも大きな不幸である。」と云いました。

年が若いのにどんどん上へあがる。世の中はこんなものだと思うたら大間違いである。これは修練というものを欠いてしまうことになる。若い歌手や俳優などは少し人気が出てくると周囲がわいわい騒ぎまます。これは当人にとって大きな不幸です。

人間を本当に大成させるためには長い間の年をかけた修練・習熟というものが要るのであります。特に幼・少年時代というものは、できるだけ本人自身の充実・大成に力を注ぐことが大切です。

最初にも書きましたが、この「小学」は今から約九百年前に書かれたものであり、人間の育成という根本的なものは古今東西変わりがないということをおもひは認識する必要があります。

(安岡正篤氏著「人間としての成長」PHP文庫を参照)

井上昌幸

いのつえ まさゆき ●1940年1月1日生まれ。1961年大阪府立大学工業短期大学部卒業。1961年日本電気硝子(株)入社。2000年日本電気硝子株 定年退職。現在、滋賀県農業種交流連合会副会長、STEP(滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合)専務理事、滋賀県技術アドバイザー、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人

資格/ISO14000&9000審査員補

本の紹介

最近入手した気になる本を紹介します。

サステイナブル 建築



●著者／林 昭男
●発行所／学芸出版社
●価格／2100円(税別)
●ポイント／産業社会から環境主義に向かつて建築はどう変わるのか
―循環型社会の建築像を探る―
●内容／今「一番大事なこと」は一人ひとりが環境への倫理観を持ち、日常の暮らしのなかで環境への負荷をつとめて少なくすること

(著者からのメッセージ)
著者はサステイナブル(持続可能)建築の第一人者。本書ではエコからエコヘー建築からコミュニティへの環境変化の流れをわかりやすく解説。小舟木のエコ村や滋賀県立大学の取り組みなど具体例を挙げて紹介している。短評図もありわかりやすい。

循環ビジネス戦略



●編集／経済産業省環境政策課環境調和産業推進室
●発行所／ケイブン出版
●価格／3300円(税別)
●ポイント／循環型社会を築くビジネス支援のあり方
II「循環ビジネス戦略」II
I「エコタウンや地域に根ざしたリサイクル産業の将来像とは?」国や自治体の役割とは?
●内容／平成9年から経済産業省に環境調和産業推進室が設置された。企業や産業界の環境保全活動や環境ビジネスの取り組みを支援するためだ。廃棄物問題からリサイクル事業、エコタウン構想にいたるまで「地域循環ビジネス専門委員会」を設置し検証と提言を重ねた。その集大成が本書である。現在の日本の環境状況を分析し地域の取り組みを紹介している。また環境ビジネスの全国事例紹介もあり、国と自治体と企業の方性が示唆されている。

経営理念 人と大地が輝く世紀に



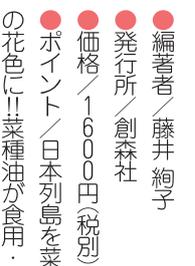
●著者／赤石義博
●発行所／鉦脈社
●価格／1143円(税別)
●ポイント／暮らしを成り立たせる経済を「何のため」に経営するのかと自問しつつ、生きるこの原点から経済の意義を問い直して、地域とのかかわりの中に、企業自立と地域自立の道筋を描く。
●内容／中小企業家同友会の会長として活躍する筆者が2003年の講演に加筆修正をしたもの。経営理念を深めるために「何のため」に経営するか、「経営理念の外部発信と地域再生」自覚を持つ主体者づくり―を提言としている。実体験と事例を交えながら問題を指摘。大切なことは良いパートナーが作れるか、にあるようだ。

一柳良雄のベンチャー実践塾



●編著者／一柳良雄
●発行所／日刊工業新聞社
●価格／1900円(税別)
●ポイント／時代は今や、資本がお金から「創造的実行力」に変わろうとしています。皆さんもこの本から一柳さんの人間力を盗み、ベンチャー界のカリスマ実践者を目指してください。
フリープロデューサー木村政雄氏推薦
●内容／夢、ビジョン、実行、人材育成、ビジネスプランニング、ファイナンス、マネジメント、株式公開、環境、成功者へのインタビューが順に説明されている。ベンチャーを目指す経営者のノウハウ本。

菜の花エコ革命

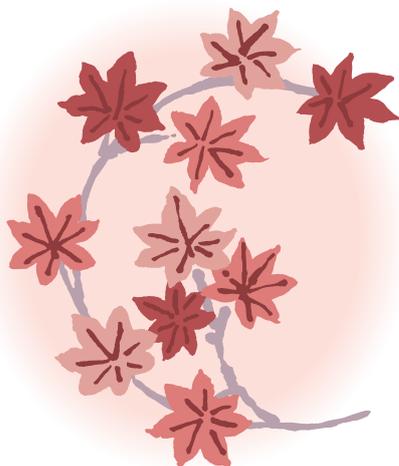


●編著者／藤井絢子
●発行所／創森社
●価格／1600円(税別)
●ポイント／日本列島を菜の花色に!!菜種油が食用・バイオ燃料・せっけんに―資源循環を地域で実現する
●内容／著者は菜の花プロジェクトネットワークの生みの親。菜の花畑で癒された著者が全国に菜の花ブームを巻き起こすまでの軌跡が書かれている。女性の感性を生かした目線で活動を起こす過程が興味深い。環境問題に一石を投じる書。写真は4ページ参照。

イタリア小さな町の底力



●著者／陣内秀信
●発行所／講談社
●価格／1700円(税別)
●ポイント／イタリアが放つ強烈な輝きと個性の謎が解けた!
●内容／イタリアに魅せられて三十年、著者がフィールド調査したイタリアを紹介。歴史・風土・建築・食べ物・暮らし方をつぶさに紹介。



私のこころに残る一言

「イカクビ退治」、「相対優位逆転の法則」 又は「怯むな！」

森 建司



イラスト：佐々木洋一

少々レベルの低い話の様で恐縮だが、「イカクビのイはいらいらのイカはかつかのカ。クはくよくよのク。ビはびくびくのビ」である。つまり日常生活の中で「いらいら、かつか、くよくよ、びくびく」は止めようと言うことである。

「相対優位逆転の法則」と言うのは、自分が対峙する相手の立場の方が優位で、こちらが劣位だと認識した時に、自分のウィークポイントを逆手にとって戦えば必ず勝てる（あるいは勝つことが出来る）と言うことである。

そして究極に求めるものは、「怯むな！」と言うことになる。

私は幼少の時から、吃音であった。吃音とは通常時には発声器官等に問題は無いのに、緊張すると硬直してしまつて言葉が出なくなる。もともと病気ではないので、治療の対象というより本人が自分の劣等感に打撃つて、多少のことでは動揺しない、強い心の状態を常に作つておくことが治す唯一の手段である。

吃音も体験者で無いと理解できないほど辛いものだが、この世の中にはもつと厳しい逆境に耐えている人も多い筈だ。その人たちが「自分は駄目だ！」と諦めてしまうのではなく、自分を信じて「心の壁」に敢然と挑戦し克服する事と、どうにもならないウィークポイントはむしろ「その重みを背負いながら立派に生きている」ことを誇りとして（あるいは武器として）戦い抜くと言う姿勢を貫くことが大切であろう。繰り返すようだが「人は心の壁の囚人で一生を終わる」と言う言葉、これは蓋し名言である。自分で出来ないと言いつけてしまつて、「心の壁」の外の事は諦めてしまふのではなく、心の壁は文字通り心が作ったものであり、破れない障壁ではない。時には蛮勇を奮つて当れば意外に道が拓けると言う教えである。

その心の壁に挑戦するための応援歌が、「イカクビ退治」「相対優位逆転の法則」「怯むな！」である。いろいろな場面で常に積極的な精神状態を堅持すること、臆病になる心を戒めるためにも時折反復して自分を励ましている。

ただこの考え方は「自分自身を知る」という謙虚で誠実な姿勢とは違つて、自己を過大評価して、自信を持って楽天的に生きようとする世俗的な生き方をしようと言うものである。人生をどう生きるか。自

ちょっと一服のコーナー
M・O・Hの窓



▲「伊吹山奉納太鼓踊り」

江戸時代に雨乞いに応じてくれた伊吹山の神に感謝し、その返礼としてはじまった。稲刈りも終わった10月1日豊作を祝い、200名以上が一同となって三之宮神社に集い、老若男女が夜まで踊りを奉納する。現在は5年毎に行われ、次回は2005年。また、三之宮神社は伊吹山登山口にあり、近くには、名水「ケカチの湧（ゆ）」が夏でも滾々と流れている。〈写真・文／辻村耕司〉

ささぎ よついち ●1940年生まれ。高校在学中より習作のため、長浜市周辺の風景を数多く描く。1964年長浜市展特選受賞、以降受賞を重ねる。滋賀県展特選4回受賞。西友長浜案内などで個展数十回開催。現在、デザイン・製版事務所代表。著作には画文集、30年前の長浜がある。市内にて洋画入門講座を開き、後進の指導にも尽力。長浜日曜画家協会創立より代表世話役を務める。長浜市在住。

森建司

らに厳しく内省的に道を求めていくか、勝つか負けるか戦いの世界と捉えるか、このあたりの違いだろうか、皆さんはどう思われますか。

もり けんじ ●1936年 滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州(株)代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長、滋賀県教育委員会委員など
著書／吃音はなわる 遊タイム出版

《M・O・Hの会》入会受付中!

あなたも「M・O・Hの会」に入会なさいませんか。年会費3,000円で、会員になれます。会員特典として、M・O・H通信、会員交流会、講演会のご案内をいたします。ご近所お誘い合わせの上、ご入会ください。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

キリトリ線

《M・O・Hの会》入会申込書

フリガナ		年齢	
お名前			
住所	〒		
電話		FAX	
メールアドレス			
あなたの心に残った一言を書いてください。			

☆あなたも「家訓10か条」を作ってみませんか?

家族で守る事、忘れない事、挑戦する事、心がける事などなど一度、考えてみてください。父と母とお子さんとおじいさんとおばあさんと忘れかけてる何かが見えてくるかもしれません。新しい時代を素敵な環境にするため、トライしてみてください。家族でも、グループでも構いません。一度、事務局まで、ご連絡ください。ご相談いたしましょう。

☆「環境倫理経営理念」にチャレンジしてみませんか?

世代交代&時代の変革についていけず、経営方針にお悩みのかた、また、未来型企業にむけて変革をお考えの方「環境倫理経営理念」にチャレンジしてみたいかですか?こちらもお申し出下さい。担当者が伺います。実験的な試みに挑戦してください。

●問い合わせ先は、下記「M・O・Hの会事務局」まで

《12月号予告》11月末発行予定

特集：中学生が見たデンマーク～ホームステイの体験～
 連載：作家 今関 信子さん
 連載：龍谷大学 助教授 本田 裕志氏
 連載：森 建司 氏
 連載：井上 昌幸 氏「小学の教え」
 挿絵：佐々木 洋一 氏
 漫画：しみず やすお 氏
 写真：辻村 耕司 氏

「編集後記」

猛暑が続き台風がやたらとやってきて、この原因は一体何なんだと考える。科学技術がどんどん進むことが本当に人を幸せに貢献しているのだろうか。などと個人では届かぬところを心配している頃である。…「建」

家訓って…。案外難しい。行き当たりばったりの人生だから、地に足つけた考えが、なかった。今回、愛東町のママさんに座談会をお願いして反省しました。家訓って案外シンプルなのかも知れない。なんだか新しいなあ。…「琴」

「循環型社会を目指す～M・O・Hの会～」の発足に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観とか人生観、先祖とか子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～M・O・Hの会～」を設立する。

M・O・H通信 Vol.3(通巻4号)

2004年9月30日発行

●編集・発行/循環型社会システム研究所 M・O・Hの会

M・O・Hの会事務局

循環型社会システム研究所(新江州(株)内)

代表 森 建司

編集長 辻村 琴美

〒526-0111 滋賀県東浅井郡びわ町川道759-3

TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8681

email: tsujimura@shingoshu.co.jp

[入会費振込先]

M・O・Hの会 代表 森 建司

●滋賀銀行 長浜支店 817 普通 136987

●長浜信用金庫 本店 002 普通 0577468

●びわこ銀行 長浜支店 421 普通 721691